

清朝 日本統治 国民党支配
 ジェンダーの視点から台湾人の意識の変遷を探る

初来日のリムジンバスで感じた ジェンダー・カルチャーショック！

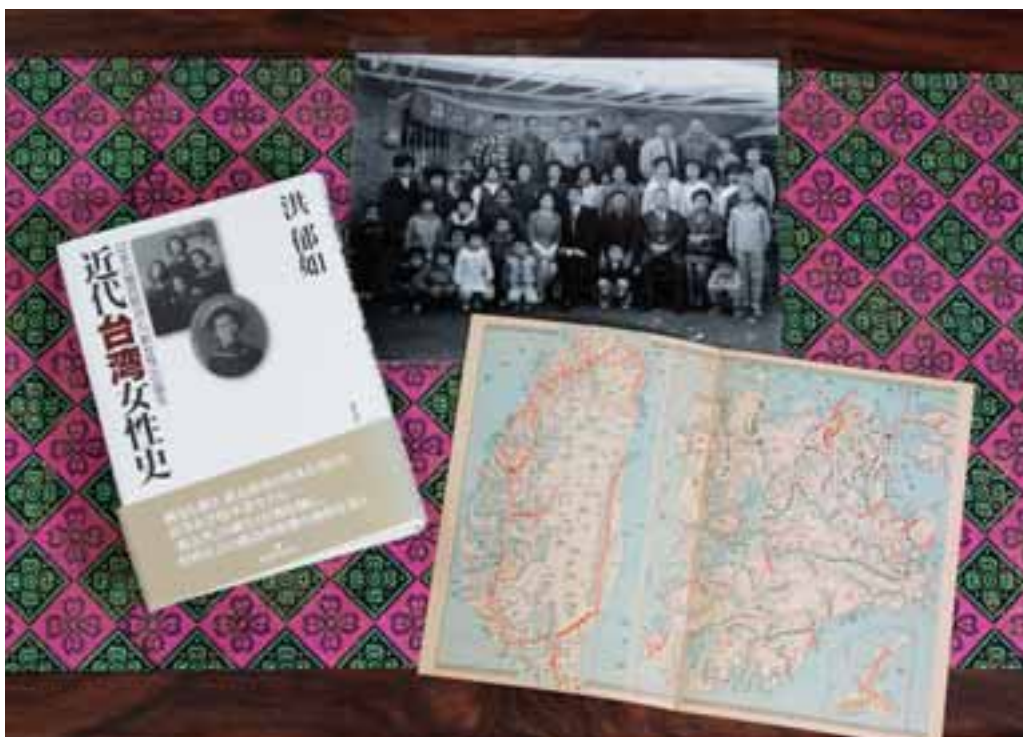
あれえ、布団が干してある！ 1992年に初来日した私は、成田空港から都心に向かうリムジンバスで興味深く景色を眺めていました。すると布団干しをしている家々が、何軒も目に飛び込んできたのです。ちょっとしたカルチャーショックでした。

布団が干してあるということは、誰かが家にいるということです。恐らく家には「主婦」がいるのだらうと思いました。台湾は共稼ぎが普通で、主婦という概念はありません。また、主婦が家事のかたわら短時間勤務するパートタイムという勤労形態も、ほとんどありません。男性も女性も基本的には同じ勤務形態を取っているのです。生活習慣や文化的な差異には、まったくといっていいほど違和感はありませんでしたが、「主婦」という存在があり得ることには驚きました。さらに、日本の女性に結婚＝就職という選択の道が存在していることにも驚かされたものです。

ナマの人間への関心から 研究テーマを変える

私の研究テーマは、近代台湾社会史。日本の植民地統治に対する台湾社会の側の受け止め方を問題にしています。実は、台湾大学では政治学を勉強していました。ところが、大学3年生後半から次第に、政治学にナマの人間が出てこないこと

に不満を感じるようになってきたのです。こうして、台湾史に目が向くようになってきました。なかでも日本の統治時代に興味を持ち、研究テーマとするようになったのです。やがて、近代日本史との



かわりや、違った学問分野にも触れてみたいと思うようになったことから、来日して東京大学大学院で勉強するようになりました。

「ジェンダー」「女性」を切り口にしたのは、先行研究に対する不満というか、自分が知りたいと思っていることがあまり研究されていなかったからです。植民地支配のナマの人間への影響は、2つまたは3つの世代に及ぶ長いものがあり、それが台湾人にどう受け止められ、時間の経過とともにどう変わっていったのかを知りたいと思っていたのです。

「無から有へ」の教育の転換を体験した 近代の台湾人女性

清朝から日本統治、国民党支配……女性は男性とはまた違った人生を送ってきました。例えば、日本の教育を受けた世代の女性は、妻として、母として家庭内での役割を担うことが期待されていました。それが、戦後に大きな転換期を迎えたのです。就学率をみても日本統治時代の台湾人女性の場合は、まだまだ低いものでした。戦後になって義務教育化されたことは、ひとつの転機となったといえます。

なお、都市のエリート層と地方の農民層とでは、同じ台湾人といっても「日本経験」に濃淡があります。それによって、戦前から戦後の時代への対応も違っているはずです。そこに、私は興味を持っています。

エリート層は、日本統治以前の漢学の伝統から、日本教育、国民党の教育への転換がありました。一方、女性は「無から有へ」の転換です。ほとんど教育を受けていなかった状態から、近代教育へと変わったのです。といっても、必ずしも受け身であったわけではありません。家族における地位を意識しながら知にアクセスする機会をつかみ、自己実現してきました。こうして、新しい女性層が生まれてきたのです。

1930年代生まれの世代は、生まれたときから植民地統治の基盤が確立していて、日本語が公用語でした。その状況が続く前提で社会を認識していたと思われます。その中で自分が置かれた位置を判断しつつステップアップを図って

いたでしょう。

こうした世代差や受けた教育の差、ジェンダーの違いによって、植民地支配への認識や世界観の形成にも違いが出てきます。史料では見えてこない民衆の姿を見いだすためには、こうした視点からオーラルヒストリーを構築していかなければならないのです。

日本のジェンダーを考えるヒントとなる 台湾のジェンダー事情

台湾では主婦はほとんどいませんし、勤務はほぼ男女同等で女性管理職比率は高いです。また、ジェンダーの偏りを無くすために、台湾の諸政党は、選挙の際の候補者名簿で、どちらかの性が四分之三を超えないことをルールとして掲げています。ジェンダーに関しては、台湾はかなり先進国とされています。来日してジェンダー・カルチャーショックを受けた私ですが、ジェンダー問題は、民族の特質というより男女間の経済力に起因する側面が強いと思います。同じ経済力を持っていれば、家庭内、そして社会におけるジェンダー関係も異なってくるはずで、制度改革が進めば、伝統的な社会規範を変えていくことが重要になってきます。

台湾での女性運動の争点は、給与問題や教育上の問題、職場での問題、採用人事の内規づくり、さらには不平等なジェンダー関係の再生産を阻止することなどになっています。教育現場におけるジェンダー関係の再生産阻止とは、男性と女性の役割を決めつけるようなことを排除すること。例えば、教科書のイラストで、母親が台所で料理をしていて、居間で父親が新聞を読んでいる、といったシーンを紹介するとします。これは、イメージとして男性の役割、女性の役割を決めつけてしまっています。新しい世代の親として、男性、女性の役割をもっと自由に捉えられるようにしようということです。

日本では変化の手本を欧米に求めることが多いですが、社会条件の似通ったアジアの現状も参考になることが多いと思います。台湾の歴史と現状を日本に紹介することは、意味があると考えています。(談)



社会学研究科准教授

洪 郁如

Yuru Hung

1991年8月台湾大学法学院政治学系卒業(法学学士)、1993年4月東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻修士課程入学、1995年3月同課程修了(学術修士)、1995年4月東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻博士課程進学、1998年9月同課程単位取得満期退学(2001年学術博士)、2002年4月明星大学人文学部専任講師、2005年4月同助教授、2007年4月同准教授、2008年4月一橋大学大学院社会学研究科准教授。著書に、『近代台湾女性史 日本の植民統治と「新女性」の誕生』(勁草書房)などがある。